

09

September
2026

[月刊] キリスト教書評誌

本の ひろば

HON-NO-HIROBA

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2026年9月1日発行(毎月一回1日発行)

第825号

出会い・本・人

「読書好きの国語嫌い」が読書会に出会ったとき 佐藤真史

特集シリーズこの三冊！

信仰の足腰を鍛えるための、この三冊！ 朝岡 勝

本・批評と紹介

ヘルマン・フィッシャー 著／伊藤慶郎 訳

シュライアマハー 水谷 誠

柴崎 聰 著

石原吉郎と安西均 木下裕也

E・ユンゲル 著／佐々木勝彦 訳

『キリスト者の自由』を読む 伊藤節彦

吉田 亮 編著

占領期日本の教育再建と越境キリスト教 辻 直人

J・デイヴィス 著／浅野淳博 監訳／岡谷和作、大川大地、鈴木仰訳
パウロと黙示 河野克也

本多峰子 著

悪と苦難の問題を考える 魯 恩碩

小河信一 著

七十人訳ギリシャ語・哀歌の和訳 磯部理一郎

金子晴勇 著

キリスト教思想史の例話集Ⅳ 愛のかたち 阿部仲麻呂

◆ 近刊情報

◆ 書店案内

広瀬由佳 神のいのちの物語



山崎ランサム和彦先生推奨！ 本書は単なる抽象的な神学書ではありません。語られているのは、「神の物語」であるとともに、自身も弱さをかかえ、傷つき悩みながらも神のいのちに生かされ、他者を生かす人生を追求している一人の信仰者としての著者自身の物語でもあります。

新書判・三二八頁・一六五〇円

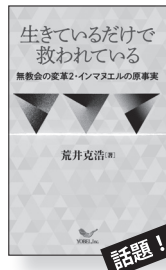
七十人訳ギリシヤ語・哀歌の和訳 小河信一〔著〕 原典ヘブライ語と七十人訳の比較分析



国家存亡の危機の時代に生み出されたヘブライ語のアルファベート詩「哀歌」。七十人訳ギリシヤ語に移し替えられた時、それはどのように変容していったのか。聖書翻訳の限界を探究することが真の叡智と人間理解への最良の手引きともなり得ることを渾身の和訳を通して明らかにする。

A5判上製・一四四頁・一九八〇円

荒井克浩〔著〕 無教会の変革2・インマヌエルの原事実 生きているだけで救われている



すべての人は、すでに無条件に、救われている！ 神が無条件に人と共に在る。滝沢克己が見出した「インマヌエルの原事実」。無教会の流れを汲む著者が伝道者生命を賭けてこれを継承し、今の言葉に語り継ぐ。……福音本来の使信に立ち返った清々しさが全編に溢れている！

8月末刊行予定 四六判上製・三四八頁・一八七〇円

遠藤周作が森田ミツに語らせた神学 田矢廣司〔著〕



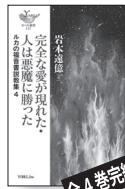
寂しさと痕跡を通して語りかける神。その足跡を遠藤文学に訊ね、イエスの現れを追い求める……。四六判・一九二頁・一八七〇円

松木充〔著〕 マルコの福音書連続説教 神の子、イエス・キリストの福音



「イエス・キリストの福音のはじめ」と真正面から書き始めた真諦に迫る。聖書を原語で味わい、文脈を読み、テキスト独自の視点を大切に……。……マルコ福音書説教の全体像を完成。四六判・四一六頁・一九八〇円
聖霊による福音宣教
「使徒の働き」連続説教
四六判・三七四頁・一九八〇円

岩本遠億〔著〕 ルカの福音書説教集4 完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った



「目から鱗」ってこういうことなんだ！ 愛する力、自身を離れて一人の人を愛するいのち、それこそが聖霊！ 各巻新書判・平均二〇〇頁・一三二〇円
1 神はあなたの真の願いに答える
2 聖霊は愛を完成する
3 ほんとうの自分に会おうとき



「読書好きの国語嫌い」が 読書会に出会ったとき

佐藤真史

「読書好きの国語嫌い」はきつとある。

学校での「国語教育」、とりわけ読解問題に、いつからか違和感を持つようになった。本―特に物語―の豊かさは決してテストで測られるものではないし、著者の意図など一つの答えに縛られるものではないと、斜に構えていた。いま思えば、こんな自分の思いを拙くとも分かち合える読書会のような場を求めていたのだ。

家庭では、在日コリアンの人権問題に、自分（日本人）の問題として向き合い、人と本に囲まれていた父親の姿に、大きく影響を受けた。しかし中学では反抗期に入り、高校は基督教徒立学園での寮生活を選んだ。

驚いたことに、自分のような本好きがそこには何人もいた。図書「館」と呼ぶに相応しい建物があり、先輩や先生たちが自分たちで造り、増築を重ねていた。奥へ奥へ進むと出会ったことのないような本たちが待っていた。いま振り返れば、「真理を探究する」学問をする」ことを身体で体験するような場所だった。薄暗い本棚の前で「まさかあなたが、ここに？」と思

うような先輩や友に出会った。

ヘッセの『デミアン』を、自分自身の姿が描かれているのかのように感じ、クラクラしながら繰り返し読んだ。シェイクスピアの『ハムレット』『マクベス』の読書会では、セリフ一つに思いもよらない解釈が重なっていることを学び驚いた。「ハトの会」という聖書研究クラブは、たった数名しか集まらない超マイナークラブだった。高校生には超難解な『ATD』や『NTD』（旧新約注解書）を片手に、疑問をぶつけあい、自由気ままに思いを分かち合った。問題を起こし自宅謹慎時に渡されたのが、創設者・鈴木弼美による『真理と信仰』だった。「人に仕えること、人の嫌がる仕事を為すことが真に貴い」という言葉は、いまも自分の指針になっている。高校3年間は、自分にとって壮大な読書会だったのだ。

言葉を友と分かち合うとき、言葉はさらに響き出す。

（さとう・まさし）日本キリスト教団荒尾教会牧師・荒尾めぐみ幼稚園園長）



▼シリーズ この三冊！

信仰の足腰を鍛えるための、この三冊！

朝岡 勝

(あさおか・まさる…日本同盟基督教団多磨教会牧師)

地域教会に仕える牧師として、三つ

の〈全体〉を大切にすることを心がけて奉仕を続けて今に至っています。一

つ目は「聖書」の〈全体〉を説き明かすみことばの説教を大切にすること、

二つ目は「群れ」の〈全体〉に心を配る牧会のわざを大切にすること、三つ

目は「神の救いのご計画」の〈全体〉を余すところなく伝える伝道と教育の

働きを大切にすることです。特に三つ目については、礼拝や求道クラス、諸

集会で繰り返し教理を学ぶことを続け

て来ました。

教会は神のみことばによって建てられ上げられていくものですから、聖書

に聴くこととともに、教会を建てることばを身に着けることに意を用いてき

ました。その際に特に大切にしてきたのが、信じることばとしての「使徒信

条」、祈ることばとしての「主の祈り」、生きることばとしての「十戒」のいわ

ゆる「三要文」を繰り返し告白し、祈り、唱え、学び続けることでした。

実際に取り組み続けて来て思うのは、

「主の祈り」はマタイ福音書やルカ福音書に、「十戒」は出エジプト記や申命記にと、それぞれ「聖書」にあることばですから、それを学ぶことや祈ること、唱和することへの動機づけは自ずと明らかですが、「信条」のことは教会が身に着けることの動機づけは必ずしも自明ではないということです。

教会なしに信条は生まれませんでしたし、信条なしに教会が建つこともなかったのですが、その意義が今も生き生きと受け継がれているのでしょうか。もちろん使徒信条に親しみ、ニカイア信条を重んじている教会が多くあることを存じていますが、しかし信条のことばへの理解やその歴史的な意味、教会にとつての信条のことばの持つ必然性などは繰り返し明らかにされていく必要があるでしょう。その点で信条のことばは告白されるだけでなく、説き明かされる必要があります、学び続ける必

要があります。そうした営みの継続の中で「われ、信ず」、「われらは、信ず」という告白が、いつそう自覚的で主体的で告白的な教会を建て上げていくだろうと思うのです。

教会の皆さんによくこんなことを話します。「からだの健康維持には足腰を鍛えることが大切。歳を取ってくるから足腰が弱ってくる。キリストのからだも同様。やはり教会の信仰の足腰を普段から鍛えましょう。躓きの事態は避けられない。でも躓いてよろめいたときにそのままバツリ倒れ込んでしまうか、そこで二の足が出て踏ん張りが利くかが大きな違い。次の足が出てしっかり踏みとどまれるような信仰の足腰を鍛えましょう」。こうして地味に地道にコツコツと信条を学ぶことを続けて来ました。

また、かつて神学校で「信条学」の講義を担当していた時には、次のよう

に繰り返していました。「信条は教会の信仰と教えの歴史のエッセンスがギュッと詰まった乾燥ワカメのようなもの。そのまま囓っても味気ないかもしれないが、水に戻せば膨らんで豊かな味わいが出る。信条を豊かな生きたことばとして教え説くには、まずその蓄積に学ぶ必要がある」。私自身も貧しいながらもこの確信に立って、これまでお仕えてきた教会で信条のことばを説き、ともに学び続けて来ました。『ニカイア信条を読む』、『ハイデルベルク信仰問答を読む』、『バルメン宣言を読む』（いずれもいのちのことば社刊）はそのささやかな記録です。

とはいえ「言うは易し行ふは難し」で、信条を学び、説くというのは容易なことではありません。腰を据えてじっくり学びに取り組むこと、そしてよい手引きやお手本から習うことがポイントです。そこでオススメしたい一

冊目は、碩学ヤロスラフ・ペリカンによる『クレドキリスト教伝統における信条と信仰告白の歴史的・神学的入門』（教文館、2025年）です。いきなり本文だけでも700頁近い大著で面食らうかもしれませんが、古代の基本信条（公同信条）から宗教改革期の信仰告白、信仰問答、そして近現代の信仰宣言など、教会の歩んで来た歴史の全体を俯瞰しつつ、信条を生み出してきた教会のリアリーと、教会を生かして来た信条の生きたアイデンティティーを総合的に論じる本書は、信条を学び説く上で必須の書物です。

訳者の本城仰太先生が訳者あとがきで「本書は速読するには不向きである。ペリカンの議論をゆっくり丁寧に追いつながら読んでいけば、得るものが非常に大きいだろう」（676頁）と記しておられるとおり、特に第一部から第四部第14章あたりまでを熟読すると、

正典・信条・職制の内的連関や信条形成史など、信条学の基礎的な学びに有益です。同書とセットで編まれた全三巻の英訳信条集を手もとに置くと、より包括的な学びとなるでしょう。

こうした基礎的な学びを踏まえつつ、良い手引きやお手本に習うにあたってオススメしたい二冊目が、古代教父神学の専門家として数々の貴重な言葉を翻訳してくださっている小高毅先生の『クレドへわたしは信じます』キリスト教の信仰告白』（教友社、2010年）です。全体は「第一部 信条の形成」と「第二部 信条の伝えるもの」の二部からなり、第一部では使徒信条、ニケーア信条、ニケーア・コンスタンチノープル信条の形成史、第二部では信条の内容が三位一体論を軸に説き明かされています。

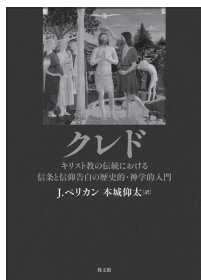
日々の伝道牧会に追われてなかなか深い学びにまで至れないジレンマを抱

える牧師にとってありがたいのは、古代教父の専門家である小高先生ならではの縦横無尽に引用される古代教父たちのことばの数々。一つの信条的表現の背後に控える膨大な歴史的・神学的議論が教父たちのことばによって紹介されています。信条のことばが信仰と教えのエッセンスなら、それを説き明かす同書もまた貴重な古代教会史・教理史のエッセンスの詰まった一冊と言えるでしょう。

最後にオススメしたい三冊目は、新約学の大家克蘭フィールドによる『使徒信条講解』（新教新書、1995年）です。「三要文」を説くもの、とりわけ「使徒信条」を説き明かす書物は日本語になっているものだけでも相当数に昇ります。その中でも本書は133頁のコンパクトな新書ですが、小さいからと侮るなかれ。名人の熟練したわざの詰まった名著で、繰り返し読

んで味わうのに適した超オススメの一冊です。第1章の「使徒信条の起源と重要性」で緒論的な事柄が扱われますが、特に目を引くのが次の一文です。

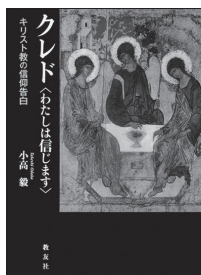
「1933年以前のドイツでは、プロテスタント教会において、牧師だけが礼拝で使徒信条を唱えることが一般的であった。しかし、1933年以降は、会衆が信条の唱和に加わり始めた。教会員たちは、教会に対するナチの攻撃に直面して、自分たちの信仰を個人的にも公にも告白するために、そうすることを望んだのである。異なる伝統や言語、国家をもつキリスト者、さらには異なる世代や世紀のキリスト者をひとつに結びつけるものは、いかに優れていようと、個人や教派あるいはキリスト者のグループによって作成された特別な声明であるよりは、使徒信条という、より効果的で力のある媒体なのである」（11頁）。



『クレド——キリスト教の
伝統における信条と信仰告
白の歴史的・神学的入門』

J.ペリカン：著
本城仰太：訳
教文館
2025 年刊
A5 判
784 頁
9,460 円

第2章以下では全部で12の章で使徒信条が説き明かされます。各項目の説明は聖書に即し、教会の歴史を踏まえ、宗教改革時代の信仰告白を用いつつ、現代の諸課題とも切り結び見事なもので、著者克蘭フィールドの聖書学者のみならず、神学者、牧会者、信仰者としての姿勢が如実に表れています。読者は本書を通して教理を学ぶことが、今の時代を生きる上でいかに重要であ



『クレド〈わたしは信じ
ます〉——キリスト教の
信仰告白』

小高 毅：著
教友社
2010 年刊
A5 判
368 頁
3,080 円

り、またいかに大きな助けになるかを知ることができるでしょう。昨年はニカイア信条1700年の記念の年でした。困難な時代にあっても確かな足取りで福音の宣教に生きるために、あらためて教会が聖書のみことばに聴き、また聖書に聴き応答してきた教理のことばに聴き続ける姿勢を自覚的に身に着けたいと思います。その際に、基本信条に取り組むことは、キ



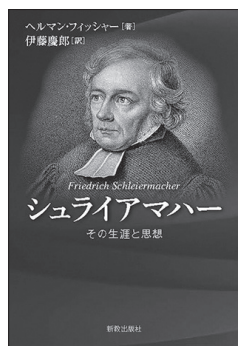
『使徒信条講解』

C. E. B. クランフィールド：著
関川泰寛：訳
新教出版社
1995 年刊
新書判
133 頁
1,100 円

リストのからだにとつての大事な体幹トレーニングです。教会のことば、信仰にことばを繰り返すうちに信仰の体幹が強められ、足腰がしつかりし、確かな足取りで歩んで行く元氣と勇氣がわいてくるはずですよ。思い立ったらその日から。ぜひ学び始めましょう！

第一人者による簡にして 要を得た入門的評伝

〈評者〉 水谷 誠



シュライアマハー
その生涯と思想
ヘルマン・フィッシャー 著
伊藤慶郎訳



ここに邦訳された近代プロテスタント神学の巨人、フリードリヒ・D・E・シュライアマハーの生涯、その学問と思想を紹介した小著は、ハンブルクで組織神学を講じた故ヘルマン・フィッシャー教授（一九三三―二〇一二）が二〇〇一年にベック社から出したものである。まずはこの重要な著作が名古屋ハリストス正教会伊藤慶郎司祭によって邦訳されたことを喜びたい。

著者フィッシャーは、長年にわたってシュライアマハー研究を第一線で牽引してきた学者であり、その豊富な知見を背景にして、この思想家の全貌を抑制された筆致で、手際よく簡潔にまとめている。出版から四半世紀を経た今もお、その間に目を見張る研究の進展があったにもかかわらず、類書は見当たらず、シュライアマハーに関心を持つすべての人々に今後の取り組みの基礎となる必須で重要な

情報を提供している。実際、二〇一七年にモア・ジーベック社（テュービンゲン）が重要なキリスト教思想家を扱う叢書の一つとして出した五〇〇頁を超える浩瀚な『シュライアマハー・ハンドブック』には三三名もの執筆陣が関連テーマを論述しているが（フィッシャー自身も研究史を担当した）、それを一人の著者で描き出すことができたところにフィッシャーの力量がよく表れている。

フィッシャーのシュライアマハーへの関心は早く、一九六〇年代にハイデルベルク科学アカデミーでH・G・ガーダマーを中心にして企てられたシュライアマハー全集（実現せず）の編纂に若手として加わったのを嚆矢とする。その後、彼はゲッティンゲンで共に学んだ盟友ビルクナーを代表として一九七二年以来キールで企画が進行し、一九八〇年から刊行が始まった批判版シュライアマハー全集（現在

も刊行中、既刊は六八巻に及ぶ）の編纂に当初から参画し、同時にその作業に伴うさまざまな関連資料や個別研究類を収蔵する「シュライアマハー文庫」（三九巻刊行中）の取りまとめ役として、最新の編纂作業と研究を資料レベルから見渡してきたのである。

この著作は、彼の生涯の伝記的叙述と神学的哲学的著作群の内容案内の二つに分けられている。全体の三分の二を占める著作群の案内には、宗教理論を展開して古典的意義を獲得した処女作の『宗教論』をはじめとして、生前に公開された著作類が要領よく案内されていて、とりわけ主著『信仰論』は、成立史やその構造、教義学史上の位置づけに注意を払いつつ、三〇頁を割いて紹介されている。読者はこの紹介を通して『信仰論』の全貌を概観することがで

きるであろう

ところで、シュライアマハーは公刊した著述の他、大学での講義録（新約聖書釈義とそれに密接に関連する解釈学と批判、イエスの生涯、美学、心理学、教育学、国家論、弁証法、哲学的倫理学他）やアカデミーでの講演、プラトンのドイツ語訳などの学術関係、さらに亡くなる直前まで続けた礼拝説教も含めて膨大な原稿を遺している。本書を繙くことを通して、神学と哲学の体系的思想家としての側面、その人物やキリスト教信仰の内実について多くの学びがなされることを期待したい。いくつか気づいた誤植などは邦訳者の伊藤氏に伝えた。

（みずたに・まこと 同志社大学名誉教授）
（四六判・二四五頁・定価二九七〇円・新教出版社）



キリスト教への 道案内

山岡健
YAMAOKA Takeshi



キリスト教信仰の中核が
余すところなく
伝えられている

この書物との出会いが、何
年も経って振り返るとき、
神が備えてくださった信
仰生活の必然として受け
とめられることを願う。

（青山学院伊藤悟氏推薦）

A5判・並製
定価 1,320 [本体 1,200 + 税] 円
ISBN978-4-86325-177-9



株式会社 一表出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

二人のキリスト者詩人

〈評者〉木下裕也



石原吉郎と安西均
柴崎 聰著



石原吉郎と安西均。戦後日本におけるキリスト者詩人の双璧である。本書は二人の詩人の比較研究の成果である。両者はキリスト者であること、戦時下の厳しい時代に自らの意思で洗礼を受けたことにおいて共通するが、詩作品の趣は当然異なる。本書は「生と死、戦争と平和、聖書と信仰、ユーモア、日本的なるもの、表現性と物語性」など、多岐にわたる主題を取り上げ、各主題に見合う両者の作品を提示しつつ、その一編一編を精緻な、行き届いた読み解きによって掘り下げていく。著者の作業は「あくまでも詩そのものに肉薄して解釈し、詩の奥義に迫る姿勢にたづぬかれている。「詩人論よりも作品論に軸足を置くということ」である。

著者は石原を「表現する詩人」、安西を「物語る詩人」と称し、作品を通して二人の個性を浮き彫りにしながら、

そのように呼び得ることの意味を説き明かす。他方、両者は詩の言葉の深さ、重み、生々しさ、凄みにおいて軌を一にする。それは人間の極限状況の言語化とも言い得る言葉であり、切り詰められたしかたで生と死の深層に迫っていく言葉であり、この世と人間の闇の奥底をえぐる冷徹な言葉であり、そうでありつつ、闇の支配に震える魂に寄り添い、闇をうがつ光と望みとを手繰り寄せようとする言葉である。二人の詩人の生死の捉え方は似通っているとされる。「感傷的・感情的なものは打ち捨てられ、言葉と表現が乾いている」ことにおいてである。あわせて「生者と死者の立ち位置が逆転する不思議さ」にも言及される。生と死とが逆説的にとらえられていること、そこに価値の転換が起こされているとの消息が指摘されるのである。このあたりに、両者がキリスト者詩人であることの機微を見て取るこ

とができるのではないだろうか。

本書には両者による対談も収められている。石原の死去の二週間前になされた対談である。両者にとって「最初にして最後のもの」「二人にとっても読者の私たちにとっても、『恩寵』のように訪れてきた極めて稀有な機会になった」とされるものである。キリスト教詩とは何か、詩と信仰、詩の言葉と聖書の言葉とはどのように切り結ぶのか等の問いをめぐって率直な議論がかわされており、興味深い。語らいの内容を簡潔にまとめた後、著者は自身の意見を添える。二人とも「神や信仰に寄り添ったと思わせる詩ではなく、外見上は呪いや反信仰に見える詩にこそ深い意味を見出している」というのが著者の見立てである。

「詩人にとって不変のテーマは、それがどのような形を

とるにしても、生と死、永遠なる者への帰依と背反を含んではないのであろうか」と著者は言う。そうであるとすれば、この「不変のテーマ」を真に追い求めていくことができるのはキリスト者詩人ではないだろうか。キリスト者詩人にしかなし得ない仕事があるのではないだろうか。この世と人間の言葉を超えた、神の言葉に根ざしつつ言葉を紡ぐ者であるゆえに。キリストにある真理と命とを知らされている者であるゆえに。著者自身も信仰者として生と死の真相を正面から見据えつつ、聖書と文学の双方においてたゆまざる研鑽を重ねて来られた方である。詩の言葉の迫力に満ちた、渾身の一冊を書き上げられた。心からの敬意を表したい。

(きのした・ひろや＝日本キリスト改革派岐阜加納教会牧師)

(四六判・二八〇頁・定価二四二〇円・新教出版社)

ヨベルの新刊案内

荒井克浩「著」

四六判上製・三五二頁
定価一八七〇円

生きているだけで
救われている

無教会の変革2・インマヌエルの原事実

荒井克浩著



生きているだけで救われている 無教会の変革2・インマヌエルの原事実

話題の新刊

すべての人は、すでに無条件に、救われている！
神が無条件に人と共に在る——かつて滝沢寛己が見出した「インマヌエルの原事実」。無教会の流れを汲む著者が伝道者生命を賭けてこれを継承し、今の言葉に語り継ぐ。イエス・キリストでもない、信じるか信じないかもない、全くの無条件なのだ——福音本来の使信に立ち返った清々しさが全編に溢れている！



ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp

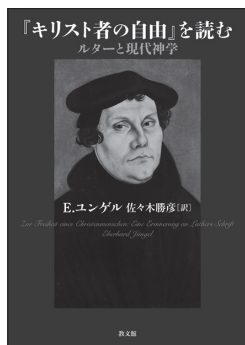
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F

TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

出版の手引き / 呈 (税込)

古典的名著を 現代の文脈で読み直す

〈評者〉伊藤節彦



『キリスト者の自由』を
読む

ルターと現代神学

E・ユンゲル著

佐々木勝彦訳



本書の成立には、忘れたい背景がある。一九七六年から七七年の冬学期、エーバハルト・ユンゲルはルターの『キリスト者の自由』を題材に講義を予定していたが、学生紛争のただ中で断念を余儀なくされた。人々が切実に問い求めていたのは「自由」であった。ユンゲルはこの問いを正面から受け止め、同年八月、レント国際ルター研究学会における基調講演として本書の母体となる論考を発表した。本書は、時代の問いと福音の自由とを真正面から突き合わせた神学的思索の結実である。

本書は三部から構成される。第一部では、ルターを単なる歴史的影響としてではなく、「神学的に問う」ことの意義が論じられる。第二部「神の不可視性から神の秘匿性へ」では、十字架の神学を軸に、言語論と人間理解が展開される。そして第三部は『キリスト者の自由』のパラフ

レーズであり、「自由な主」であると同時に「すべてに仕える僕」であるという逆説が、キリスト論的に解き明かされる。読者はこの構成に導かれながら、ルターの洞察が現代においてどのように生きるかを辿る。

ユンゲルの解釈の要は、「内的人間」と「外的人間」の区別を神学的に読み直す点にある。この区別は内面への逃避ではない。神の言葉が外から人間に語りかけ、人間を自分自身の外へと方向づけ直すとき、初めて真の内的人間が成立する。内的人間とは自分自身から「呼び出された人間」であり、神との関係において新たに生かされる存在である。そのとき外的人間もまた、隣人への愛の行為へと解放される。ここに、信仰に生きることがそのまま隣人への愛の行為へと開かれていく、キリスト者の生の基本構造が示されている。

本書は、訳者佐々木勝彦氏によって紹介されてきたユンゲル神学の流れの中で読むと、その意義がいつそう明らかになる。『世界の神秘としての神』『義認の福音』において語られた神の出来事が、本書ではキリスト者の自由として、より身近な信仰の現実へと開かれている。神が人間の罪と死を担い、人間が神の義と命に与るという出来事が、自由と愛の源泉として改めて示されている。

ルター派の牧師として本書を読むとき、説教の場で問われる根本問題に立ち返らされる。陳腐化された「自由」という問いに、教会は何と応えているのか。もし行いへの勧めが先に立つならば、すでに順序は逆転している。本書が繰り返し確認するのは、自由は達成されるものではなく、神の言葉によって告げられる現実である。説教とはその告

知であり、聞かれる出来事の中で自由は与えられる。信仰によって神に結ばれ、そこから愛によって隣人へと向かう歩みの中に、キリスト者の生は形づくられる。

本書は入門書というよりも、すでにルターのテキストに触れてきた読者に、新たな読みの地平を開く書である。佐々木訳はユンゲルの思索の緊張を損なうことなく、丁寧に日本語へと移している。本書は一読して理解し尽くされるものではなく、むしろ繰り返し読み返す中で、その都度新たな光を放つ書である。牧師・神学生のみならず、自由をめぐる問いに向き合うすべての読者にとって、長く手元に置かれるべき一冊である。

(いとう・よしひこ) 日本福音ルーテル栄光教会牧師
(B6判・一七六頁・定価二六四〇円・教文館)

黙想シリーズ

聖書 聖書協会共同訳

日々の黙想

今ここに 気付く

150の祈りと瞑想

各黙想に、
聖書の言葉と
瞑想の実践法を掲載
対象中学生から

神と共に自分自身でいるために
クリスチャンのための
マインドフルネス実践入門



著者

NEW



アイリーン・クレイゲル 著
(心理学者)

合成皮革装・スリーブ入

天地175×左右110mm 360頁

税込価格 2,640 円

ISBN978-4-8202-9294-4



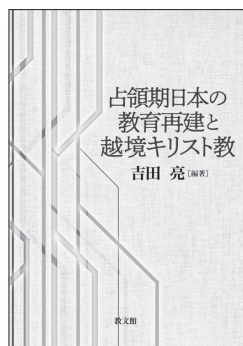
JBS 日本聖書協会

■お求めは全国のキリスト教専門書店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
<https://www.bible.or.jp>



戦後復興を支えた 日米越境者たちの記録

〈評者〉 辻 直人



同志社大学人文科学研究所研究
叢書 LXVI

占領期日本の教育再建
と越境キリスト教

吉田 亮編著



今や、町や駅で外国人と遭遇しない日はないくらい、日本社会には異文化から来た人たちが溢れている。すれ違わずに聞きなれない言葉が飛び交い、まるで日本とは思えない錯覚に陥ることもある。それだけ日本社会も多様な文化との接点が多くなったことを肌で感じる。国際化は時代の趨勢でもあり、どのように他文化と共生していくのが問われている。

こうした課題は今に始まったことではない。敵国として激しい戦いを繰り広げた日米両国の関係を戦後どう立て直していくのか、重たい課題に正面から真摯に取り組んだ人たちがいた。本書は吉田亮氏を中心とした同志社大学人文科学研究所の共同研究の成果で、日米の「和解」者として活動した「越境者」たちの様々な取り組みや奮闘ぶりが描かれている。全一四章と特別寄稿一章で構成され、プロテ

スタントの活動が中心ではあるものの、カトリック（第8章）や仏教界の動き（第9章、第14章）に関する論文も収められている。本書の研究で特に着目されているのは、両国の「和解」と「自主性」である。

戦中アメリカでは、西海岸在住の日系人が強制収容されたことはよく知られている。収容されていた日系人からは、日米キリスト者の支援は自分たちの「自主性」を剝奪しているとも指摘された（一八頁）。というのも、彼らの支援は「アメリカ社会に『社会統合』するにあたっての支援事業であり、日系キリスト者が白人教会に同化融合することで人種主義を克服し、アメリカ社会の民主化を完成させるという」発想（一一頁）だったからだという。こうした発想は戦後占領期になって、GHQ/SCAPやマッカーサーらの日本統治政策においても見られた（一八頁）。

日本における聖書普及
事業150年記念出版

旧約聖書 詩篇 四訳対照

文語訳 口語訳
新共同訳
聖書協会共同訳

歴代の聖書を、
詩篇で読み比べ、
味わってみませんか。



ハードカバー・ケース入

天地210×左右210mm
文字の大きさ約8ポイント
厚さ29mm 422頁

定価 **3,960円**

(本体 3,600円 + 税 10%)
ISBN978-4-8202-4276-5



JBS 日本聖書協会

■お求めは全国のキリスト教専門書店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
<https://www.bible.or.jp>



しかしこのようなアメリカ側の態度に対し、例えば本書で紹介されている元宣教師のチャールズ・アイグルハート(第2章)は、信仰により国同士の隔てを超越しようとした。彼は、日系人への差別行為は「アメリカの価値観に反する」として強制収容に反対(六三頁)。更に、「人と人を分断する人工的な境界、すなわち人種や国境という人工的な枠組みから自由でないことが戦争の原因」(六五頁)と主張した。人を隔てる枠組みを超えた人間同士の和解と平和を、キリスト教信仰に基づいて模索した人物だった。

戦後、同志社教育顧問として招聘されたルース・イザベル・シーベリー(第5章)は、「本能的国際主義者」とも呼ばれた人物である。彼女は「世界キリスト教徒(World Christian)」として「世界平和達成と人権的偏見排除」に

自らの使命を見出していた(一二二頁)。

本書に登場する人々は、戦争により生じた差別や対立を乗り越え、国籍や民族を超えた人的ネットワークの構築を目指している。本書でもよく「国際主義」と言及されているが、国境は超えても、ナショナリティは超えられないのか。文化や民族の間に強弱や上下の関係がない対等の関係は、どうしたら生み出されるのだろうか。

しかし現在、世界宗教であるキリスト教も一国主義的立場に収まってしまっている傾向も見られる。このような時代、越境者の生き方の可能性に目を向けさせ、枠を超える生き方に目覚めた人たちに本書は勇気を与えてくれる。

(つじ・なおと Ⅱ 和光大学教授)
(A5判・三九〇頁・定価七四八〇円・教文館)

パウロの黙示的世界観を 知るための必読の書！

〈評者〉 河野克也



パウロと黙示

黙示的パウロの研究史と展望

J・デイヴィース著

浅野淳博監訳

岡谷和作、大川大地、鈴木仰
訳



二〇世紀以降のパウロ研究の全体像を掴み、さらに議論を進めるための最良の手引き書が日本語で読めるとはなんと嬉しいことか。本書は原著著者、日本語訳者それぞれが丁寧に作業し、隅々まで行き届いた理想的な書である。冒頭には著者を含む複数の専門家による序文や紹介文、巻末には丁寧な「解説」と「訳者あとがき」があり、本書の意義が幾重にも強調される。日本語訳は正確で分かりやすく、要所要所で鍵となる単語や表現、背景などの説明が「」で挿入されることで読者は頁から目を離すことなく、スムーズに読み進めることができる。

本書の構成は、「黙示（的）」という言葉をめぐる短い「序論」に続いて、第Ⅰ部「研究史」ではパウロを黙示的神学者とする解釈をその起源から解き起こし（第Ⅰ章）、その理解がどのように展開していったかを辿り（第Ⅱ章）、

さらにその展開における新約聖書学の視点と組織神学の視点との対話の概要を描く（第Ⅲ章）。続く第Ⅱ部「展望」では、第Ⅳ章「黙示的パウロをめぐる未解決の問い」において、第Ⅰ部で紹介した研究者たちとの批判的な対話を通して、さらに議論を深めるべき領域を浮き彫りにし、第Ⅴ章「学際的観点から見たパウロの黙示神学」では、カー・バルトの神学との親和性を体系的に描き出しつつ、著者自身の貢献を提示する。

「序論」で紹介されるとおり、黙示（文書／思想）をめぐっては、その意味内容についての混乱が指摘されたことを受けて、第二神殿期ユダヤ教における「黙示録／黙示文書」各書の内容を正確に反映する定義が目指された。その中で、終末論を本質的な要素とするか、啓示を本質的な要素とするかで大きく二つの方向性が見られることを指摘し

つつ、著者自身は終末論を本質とする理解がパウロ研究においてなお支配的である状況に危惧を示す（本書六二、一二三―二六頁参照）。しかし著者は、第Ⅰ部においてこうした分かりやすい分類を使って研究史を概観するのではなく、時系列的に主要な研究者を丁寧に誠実に紹介する仕方

し、的確かつ刺激的である。罪／悪を神に敵対する霊的実在とする黙示的理解において、人間の側の責任をどう捉えるかが重要な争点となるが、著者は罪の起源を霊的実在に置く理解が決して人間の責任を不問に付すものでないと強調する（一五六―六六頁参照）。この点については、訳者の岡谷和作氏がすでに優れた論考を発表している（『律法違反』と『諸力』…罪論の包括的理解を目指して）『福音主義神学』54号「二〇二五年」一四九―七〇頁。

それこそが学術的議論の本質である。

その上で、本書の最大の意義は第Ⅱ部にあることを強調したい。第Ⅰ部で紹介された各議論から重要な争点を読み取り、それがパウロ研究のみならず神学においてどのような影響を持つかを、認識論、終末論、救済論にわたって提示する著者の論述は、黙示の本質を啓示と見る見方を反映

ちているが誌面が尽きた。最後に、本書の最強の翻訳チームに心から賛辞を送りたい。

（かわの・かつや＝東京神学大学特任准教授
（A5判・二六八頁・定価三九六〇円・教文館）

神学ダイジェスト140号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にある
って、多様な価値観に直面するキリスト者。
本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現
代人のかかえる信仰への真摯な問いに光を
あてる。

2026年6月発行
A5版120頁
定価638円（税込）

特集 今日のカトリック倫理神学

AI技術の規制——執事としての管理責任—— 秋葉 悦子

倫理的行為者としての集団

良心と根本的選択

教皇フランシスコの技術主義パラダイム批判

AI倫理学のために

性に関する罪と聖体拝領

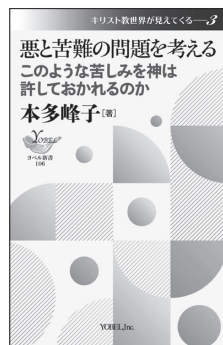
——LGBT、離婚した再婚者の包摂への批判に答えて——

R・W・マケロイ板機卿
K・シュミット

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

難解な神義論の歴史を常に 「苦しむ者の視点」に立って

〈評者〉 魯 恩碩



悪と苦難の問題を考え る

このような苦しみを神は許して
おかれるのか

本多峰子 著



本書は、キリスト教神学における最大の難問「神が全能で善なる存在なら、なぜ世界に悪と苦難が存在するのか」(神義論)に対し、聖書学と組織神学の双方から真摯に向き合った力作である。著者は2011年の東日本大震災や、現在も続くパレスチナでの無差別な殺戮などの悲惨な現実を前に、「なぜ神はこれを許しているのか」という切実な問いを自らの研究の中心的課題に据えた(4―5頁)。

本書は大きく二部構成をとる。第一部「聖書での悪の問題」では、旧約聖書がいかに苦難と向き合ってきたかを跡付ける。旧約聖書の主流である「応報思想(因果応報)」の限界をヨブ記の嘆きから浮き彫りにし、義人の理不尽な苦難に対する聖書的な応答を探索する(60―67頁)。特に注目すべきは新約聖書のイエスの姿勢である。イエスは、病や障がい「罪の罰」とする当時の支配的な見方を明確

に否定した。そして「なぜ悪があるのか」という理論的な問いに答えるのではなく、苦しむ者に対してはらわたがちざれるように「深く憐れみ」(98―99頁)、病を癒して社会的な関係を回復させるための実践的行動をとったことが強調される(96―97頁)。

続く第二部「組織神学の神義論」では、歴史上の代表的な神義論を検証する。アウグスティヌスから現代のプランティンガへと連なる「自由意志弁護論」(141―152頁)や、エイレナイオスから現代のジョン・ヒックへと発展した「魂の形成(成長)論」(153―166頁)の意義を認めつつも、著者はこれらを鋭く批判する。ヒックは苦難を人格的成長のための環境や道具と見ますが、無垢な子どももの苦痛や、アウシュヴィッツの極限の悪は、決して霊的成長の手段として正当化できないと論じる(158―166頁)。さらに、アウ

シュヴィッツを経験したユダヤ人の「抗議の信仰」やエリ・ヴィーゼルの思想を紹介し、神を法廷に引きずり出して有罪を宣告しながらも、なお祈りを捧げ、神との関係を放棄しない彼らの壮絶な実存的姿勢に深い共感を寄せる（182―196頁）。

本書の最大の長所は、難解な神義論の歴史を無味乾燥な教理の羅列に終わらせず、常に「苦しむ者の視点」に立つて評価しているところにある。「どのような苦しみも、決して、神が望んで私たちに与えた『神のみ心』などではない」（203頁）と言い切る牧会的な結論は力強い。神は不条理な苦難のただ中で私たちに寄り添い、共に痛む存在である。聖書は悪の存在理由は説明しないが、私たちが悪と闘い、苦しみを減らしていく力を神が与えておられることを示している。

他者の痛みを「神の計画」という名のもとに安易に正当化することを拒む本書の姿勢は、不条理な悲しみの淵にあり、「これは神からの罰ではないか」と自らを責める人々に、深い慰めと解放をもたらすはずである。一般読者に向けて平易に記されているがゆえに、「神の全能性と善性」という哲学的難問に対する組織神学的な最終回答としては、さらなる展開の可能性を期待したい部分もある。しかしそ

れにもかかわらず、本書は苦難に直面する私たちがいかに実践的に応答すべきかという地点へと読者を導く、豊かな力を備えている。神学生や牧会者はもちろんのこと、理不尽な苦しみの意味に思い悩み、神への問いを抱えながら生きる現代人に広く薦めたい一冊である。

（ろ・うんそく＝国際基督教大学教授）

（新書判・一九二頁・定価一五四〇円・ヨベル）

未来へと語り継ぐ本歌を見事に

浮彫！

〈評者〉磯部理一郎



七十人訳ギリシヤ語・ 哀歌の和訳

原典ヘブライ語と七十人訳の比較分析

小川信一 著



言語化により、人は個人も共同体も体験を分類整理し記憶に定着させ、記憶を運用して思索を深め、新たな自己を体系化する。異言語の翻訳により、各言語で構築された情報は共有され、異文化間の省察を経て進化発展し人類共通の知的遺産となる。旧約聖書の七十人訳により、ヘブライ固有の宗教伝承はヘレニズムの垣塙に移入され、ユダヤの体験と思考は個別から普遍に精錬され叡知の新遺産に生まれ変わる。民族神 (יהוה) は世界神 (ὁ θεός) となり、世界的叡知に仏明され、世界史的意義が賦与される。ユダヤの宗教体験はヘレニズムの叡知と対峙しつつ固有の意義を深化させ、鮮明な自覚となつて再構築される。新約聖書の旧約引用は七十人訳によるが、モーセの神「わたしはある」 (אֲנִי הוּא יְהוָה) (出3:14) はイエスである神「ἐγὼ εἰμι」 (Ἐγώ εἰμι) (ヨハネ8:58等) の福音 (εὐαγγέλιον) となる。アラマイ

語イエス伝承はギリシヤ語化過程で正典化の道を辿る。

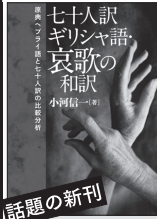
『七十人訳ギリシヤ語・哀歌の和訳』出版は、小川信一牧師の意義深い試みで挑戦でもある。「哀歌」は歌い始めの間投詞「ああどうしてμωα」に由来し「哀歌μωα」(複数形)と呼ばれ、アルファベット順に配列された3音律と2音律の詩文学による五歌(章)から成り、捕囚を記念想起して歌われた神殿劇場型挽歌と言える。成立は、バビロニア・タルムードで「エレミヤが哀歌を書いた」(『最後の門』13a)、歴代誌下で「エレミヤはヨシヤを悼んで哀歌を作った」(35:25)とされるが、第二神殿での記念祭儀を背景に捕囚前後かと想定される。七十人訳は「悲嘆 *θρηνη*」ウルガタ訳は「悲嘆 *lamentationes*」である。本書の構成は「はじめに、用語解説と表記、七十人訳・哀歌のアルファベットの見出しと順序、第1章七十人訳・哀歌

の和訳と比較対照、第2章マソラ本文と七十人訳・哀歌の相違点、七十人訳・哀歌の和訳一括表示、補遺1〜4から成る。七十人訳で訳者も使用本文も不明ゆえ異読意図の解明は困難だが、本書はマソラ本文 (Biblia Hebraica Quinta, 2004) と七十人訳 (Gottingen Septuagint, 3d Edition, 2006) に基づき、厳密な言語間の比較分析を試みた邦訳哀歌である。圧巻は第二章「マソラ本文と七十人訳・哀歌の相違点」で、R. シェーファーによる相違点 (BHQ第18分冊) に加えて、著者独自の8項目が考察され、逆にマソラ本文を鮮明に写し出す。本来ヘブライ語未完了形はギリシャ語未来形に変換されるのが正則だが、マソラの民からすれば、神の神殿破壊と捕囚は過去に忘却すべき歴史でなく「未完了」で、神の出来事として徹底的に

主体化され「ああ、主はどうしてですか」と今現在も続く痛みであり、未来に向かう厳肅な嘆きと訴えとなり神の愛と義を根元から弘明する神殿劇場型挽歌となる。ギリシア語化は捕囚を客体化し歴史化させ、未来に語り継ぐべき今の教訓とする。ヘブライ語未完了形からギリシア語アオリスト系の変換(「なにより自分の怒りをもつて暗くされたのか」(ὅτι καὶ ἐνὶ ὀργῇ σου) 2:1a 同書95頁)は異例だが、ヘレニズムの客体化と歴史化の事例ではなかろうか。著者は、七十人訳哀歌の邦訳以上に、用語法比較分析からヘブライ本文とギリシア訳の双方向に光を当て直し「哀歌」そのものを浮き彫りにした。比較分析で本来の「哀歌」を新鮮に現出させた。

(いそべ・りいちろう) 日本基督教団隠退教師
(A5判・一四四頁・一九八〇円・ヨベル)

ヨベルの新刊 / 近刊案内



話題の新刊

国家存亡の危機の時代に生み出されたヘブライ語のアルファベット詩「哀歌」。七十人訳ギリシア語に移し替えられた時、それはどのように変容していったのか。聖書翻訳の限界を探究することが真の叡智と人間理解への最良の手引きともなり得ることを渾身の和訳を通して明らかにする。

A5判上製・一四四頁・一九八〇円

小河信一 [著] 原典ヘブライ語と七十人訳の比較分析

七十人訳ギリシャ語・哀歌の和訳

大韓聖公会 全国女性聖職者会 [著] 四六判・二二四頁
関澄子訳 近刊 一八七〇円

私たちの司祭 共に歩き出す 女性たちの道



反響

韓国聖公会の歴史において女性が按手礼を受け司祭となるのはまさに茨の道。司牧の現場でも差別と偏見、冷遇と拒絶は今なお絶えない。それでもイエスのいのちのパンを人々と分ち合うために私たちはこの道に召された。歴史と宣教の主体である女性たちによって綴られた現代韓国の教会史。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税別込)

人間の生々しい現実を端正な言葉 でみずみずしくも整然と物語る

〈評者〉阿部仲麻呂

本書を手にしたときに、「ああ、40年前にこの本を手にしていたら」と思わず溜息が出た。異性への激しき愛を治められぬ我が身ゆえに愛を巡って随分ともがき、のたうちまわったからである。美しき者への愛を決然と断ち切り厳しい道に身を投じた経緯は凄まじいものだが、あれほどに苦悩しなくても済んだやもしれない。この40年においては福永武彦『愛の試み』（新潮社、1975年）に救われた。評者は過去に「日本の近現代文藝における『愛』の虚偽と可能性——伊藤整から島本理生に至る八人の作家を手がかりにして」（『女と男のドラマ——現代における愛の源泉』日本キリスト教出版局、2013年、275―298頁所載）という論文を書いた際に伊藤整の評論の内容の限界に気づいたが、いま金子晴勇先生の新著を読み終えて力強い支えを得た。本書は金子晴勇先生が最期に手がけた作品である（享年



キリスト教思想史の例
話集Ⅳ 愛のかたち
金子晴勇著



94歳「1932―2026年」）。つまり、彼の思想家としての人生の集大成が私たちの目の前に提示されている。本書を読むと、斬新な「解釈」が随所に顕れてくる。「エロス」（人間的な愛）と「アガペー」（神の愛）とが決して切り離せないひと流れの愛の姿として連続しており、エロスがあるからアガペーも実現され得る。同様の視座は教皇ベネディクト16世回勅『神は愛』（カトリック中央協議会、2006年）でも強調されたが、金子先生は参照していない。こうして異なる研究者が別々の場所で見極めたことに挺身したとしても誠実に歩めば共通した洞察を得ることがわかる。この根本視座は金子先生によって次のように説明されている。「色情は確かに罪惡の根源かも知れないが、人間としての愛情に潤いややらか味を生み、色気や色つやの源泉になるばかりか、宗教的発心や藝術の原動力

とも魅力ともなっている。ここに性の昇華が果たす大きな役割が見られる。だから性衝動は思春期の混乱だけを生みだすのではなく、性欲の拡散によって他の諸感覚に色をそえているし、情念や想像力にも作用し、精神を高揚させ、理想へ向かって飛翔させる機縁を与えている」(211頁)。

実に、人間の本質を見事に言い当てた文章ではないだろうか。人間の愛情が洗練されることの極意が集約されている。たしかに金子先生の人生の歩みからにじみ出てくる洞察力が鍵語として効いている。「潤い」・「やわらか味」・「色気」・「色つや」・「宗教的発心」。これらの要素が人間の愛情を重層的で複雑な調和状態へと導く。金子先生の言葉づかいにはみずみずしさがある。東西の古典文献の数々の核心を鋭く整える構築の機微は九鬼周造による『「いき」の構造』の色つやを論じる硬質な文体とも呼応しつつもあたたかみも加わっているからだろうか。ともかく教皇ベネディクト16世も金子先生も実は聖書研究を土台とした真理の探究という信仰者の旅路を歩んだのであるから同じ洞察に至ったのだろう。参考までに教皇ベネディクト16世の文章も以下に引用する。「実際には、『エロース』と『アガペー』——上昇する愛と下降する愛——を完全に切り離すことはできません。それぞれ異なる側面をもった二つの愛

が、一つの愛の現実の内にふさわしい一致を見いだせば見いだすほど、愛そのものの真の本性がいつそう実現します」(『神は愛』7頁)。

それでは本書の構成を眺めよう。第1部では「愛のかたち」がまとめられている。各項目は以下のとおりである。「エロース物語」・「フィリア(友愛)物語」・「アガペーとカリタス」・「カリタス」・「宮廷恋愛とトゥルバドゥール」・「ロマンティックな愛」・「自然主義的な愛」・「近・現代文学における愛の物語」・「東西の愛の質的な差異」。欧州から始まり日本の文学に至るまでの東西の思想史をたどる壮大な試みである。第2部では「邂逅の現象学と愛の成長」がまとめられている。各項目は以下のとおりである。「経験の諸次元について」・「愛の成長過程」。前者では、身体・心理・精神・人格という諸次元を通して人間の愛の本質を説明している。後者では、愛の邂逅(出会い)・愛の相互期・愛の献身期・恋愛・結婚・聖なる愛の意味を論じることで人間の成長の流れを描いている。両者は各自の成長を促すための知恵を授ける記述となっている。こうして本書を読むことで、まず「私」がどのような人間であり、どのように成長するのが見えてくると同時に、「隣にいる他者」がどのような人間であり、どのように成長するのも

見えてくる。しかも過去から現在を経て未来へと続く人類共同体全体の交流の可能性も予測されてくる。

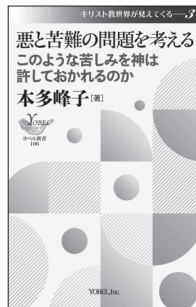
金子先生の長所は、③人間の生々しい現実を端正な言葉でみずみずしくも整然と物語る姿勢である。①生々しい現実に溺れる人はその出来事を言語化できずに、ますますものがき苦しむ。②逆に現実の経験を何も積み重ねないまままで物事を言語化するだけの人は人間らしさから遠ざかり、つまらぬ者になり下がる（生身の経験が欠如しているA I「人工知能」の作動状況と重なる）。金子先生は①と②を巧みに調和させて③の状況を創造する洞察力の名手である。評者は長らく①の状態に陥り、敢えて②の姿勢を自分に課したが、いまや金子先生の本を通して③を目指すことにした。チャーミングに生きることにしたのだ。

実に、1986年、高等学校二年のときに、金子先生による『キリスト教思想史入門』（日本基督教団出版局、1983年）を読んでヨーロッパ文化の根源に想いを馳せた日々がいまや懐かしくよみがえる。走馬灯のように。あの頃から40年を経て、こうして、いま金子先生の最期の作品の「書評」を締め括る。ついで直接に邂逅することはなかったが丁寧な書簡を賜り、常にお互いの作品の熟読を通して学び逢えた。感慨深い40年の学びに感謝しつつも、信仰者として生きることの意義を改めて思い巡らす機会となった。心より御礼を申し上げつつ御冥福を祈念したい（金子晴勇先生、享年94歳「1932―2026年」）。

（あべ・なかまろⅡ日本カトリック神学院教授）
（新書判・二六四頁・定価一五四〇円・ヨベル）

本多峰子「著」このような苦しみを神は許しておかれるのか

悪と苦難の問題を考える



答えないのはわかっているが！ 古来「善なる神に創造されたはずのこの世界になぜ悪があるのか、世界はなぜ苦悩に満ちているのか」は人々を悩ませ、「神義論」における論議が烈しく繰り返されてきた。本書はその格闘の歴史を研究者視点でつまびらかにし、現代に生きるキリスト者として静かな着地点を誠実に探る。

新書判・二二二頁・一五四〇円

3部作

完結！

イエスとの出会いと救い 新約聖書の人びと

新書判・一七六頁・一五四〇円

イエスの語るたとえ 今、あなたはどうか生きるか

新書判・二一六頁・一五四〇円

富田正樹「著」新型キリスト教入門 その2 重版準備中！

戸惑いながら信じてる50



反響！

現代のクリスチャンは社会の諸問題に聖書からの応答や回答を得ることができないのか？ 聖書が書かれた時代、戦争、暴力、搾取、差別などの話題には反応するが、でも原発、臓器移植、デザイナー・ベビーなどについてはナッシング!? どうしたらいいか。このさらなる難題に牧師とみティが挑んだ第2弾！ 四六判・二二六頁・一五四〇円

富田正樹「著」疑いながら信じてる50

3刷出来

新型キリスト教入門 その1 四六判・一九二頁・一五四〇円

持って生まれたことばを生きろ

ヤコブ書 試訳・註・メッセージ

深澤 奨「著」

持って生まれたことばを生きろ



パウロ大先生を正面切って批判する過激で危険な書物が新約聖書に...それが藁の書簡と呼ばれた「ヤコブ書」。牧師としての著者はギリシア語聖書本文に肉迫する「私訳、試訳」を丹念に行った上で、この書の魅力と隠された使信を丁寧に掘り起こす。

四六判・二二四頁・一八七〇円

金子晴勇キリスト教思想史の例話集全6巻

IV 愛のかたち



キリスト教思想史を学ぶすべての人に、あたかも絵画を観るようにに理解できる例話集！「第4回配本」

新書判・二五六頁・一五四〇円

エックハルト 阿部善彦「訳」

中世の神学者であり、霊性の巨匠が語るエックハルト版「君たちはどう生きるか」。本書は、エアフルトの修道院の院長であり、テューリンゲン地区における管区長代理である、説教者兄弟会のエックハルトが、若いドミニコ会士たちと行った諸々の講話である。

エックハルト 阿部善彦「訳」

話題！

新書判上製・二八〇頁・一九八〇円





全国のキリスト教書店員が選んだいちばん読んでほしい本

キリスト教書店大賞2026



2025年1月～12月に出版されたキリスト教書の中から全国のキリスト教書店員の投票により大賞が決定! 主催 キリスト教出版販売協会

大賞決定

価格は10%税込

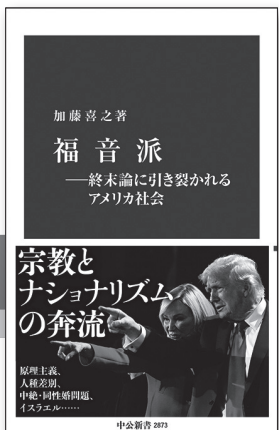


福音派

—終末論に引き裂かれるアメリカ社会

加藤喜之著

定価1,320円 中央公論新社



受賞のことば

著者 加藤 喜之氏

米国の福音派の歴史は、政治と宗教の関係を考える上で重要なテーマです。真理の名の下に、愛を忘れて他者を排除し、傷つける振る舞いは今なお見受けられます。そうした過ちを繰り返さぬよう、これからも歴史と思想から謙虚に学び続けたいと思います。このたびの栄誉に心より感謝申し上げます。



教文館キリスト教書部
永井将史さん

オススメ

トランプ政権の誕生に大きな影響を及ぼしたと言われる福音派—その思想や歴史を論じ、分断するアメリカ社会のいまを伝える一冊。

宗教と
ナショナリズム
の奔流

原理主義
人種差別
中絶・同性婚姻問題
イスラエル……

中公新書 2073



こどもに語ろう
聖書のおはなし160

久世そらち 編

定価2,200円

日本キリスト教団出版局

新生館
神学 宇さん

オススメ

幼稚園から教会学校まで使える例話が充実しており、テーマから聖書箇所を探すこともできる。



聖書の
ことば辞典

小友 聡 著

定価1,980円

教文館

神戸キリスト教書店
福島知子さん

オススメ

読むだけで聖書が近くなる!「なんとなく知っていた」が深まります。



旧約聖書
詩篇
四訳対照

定価3,960円

日本聖書協会

パイブルハウス堺
片山のぞみさん

オススメ

文語訳、口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳が見開きの頁に並んでいて、一度に読み比べることができます。翻訳の歴史を感じられる一冊。



他のノミネート作品

聖書のなかの
人たち

MARO

(上馬キリスト教会
ツイッター部) 著
定価1,980円
笠間書院



わたしがいる あなたがいる
なんとかなる

「希望のまち」の
つくりかた

奥田知志 著
定価1,870円



聖書通読31 ※在庫僅少

神の救いを
たどる旅

石田 学 著

定価1,760円
日本キリスト教団
出版局



J.S.バッハのオルガン音楽
全曲解説

ピーター・
ウィリアムズ 著
廣野嗣雄・
馬淵久夫 監訳
定価13,200円



日本史の中の
クリスチャン
たち

植松三十里 著

定価2,200円
サンパウロ



祈られて、がんばる

ボクと牧師の
24の往復書簡

峰岸大介・
大崎重徳 著
定価1,870円



教会は初めての
あなたへ

32人の
牧師からの手紙
小林よう子 編
定価1,430円
日本キリスト教団
出版局



ルピナス・ヴァレーへの道

夢をあきらめ
ないで
森本加代・
森本二郎 著
定価1,760円



キリスト教書店大賞Facebookページ

<https://www.facebook.com/christianbookoftheyear/>

「いいね!」をクリックして
最新情報をGET!
QRコードで簡単アクセス! →





キリスト教書店大賞2026 授賞式・記念講演会



主催 キリスト教出版販売協会

全国のキリスト教書店による

「キリスト教書店大賞2026」に

『福音派—終末論に引き裂かれるアメリカ社会』

(中央公論新社、2025年)が選ばれました。

これを記念して、授賞式(表彰状授与)に続き、

著者の加藤喜之氏(立教大学文学部教授)による

講演会を開催いたします。

記念講演



受賞者・講師

加藤 喜之氏

(宗教学者、立教大学文学部教授)

「宗教復興」の正体 —政治化するアメリカのキリスト教

講演概要

激動する世界において、宗教は再び存在感を増し、「宗教復興」とも呼びたくなるような状況が生まれています。しかし、この変化は、必ずしも既存の教会や教団の復興を意味するものではありません。実際には、多くの教会で信者数の減少が続き、従来どおりの活動を維持できなくなっている教団・教派も少なくありません。では、今日、存在感を

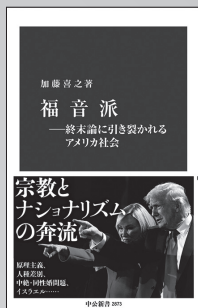
示している宗教とは何なのでしょう。本講演では、教会そのものではなく、政治家、とりわけポピュリストたちによって政治的資源として用いられる宗教的な言説やシンボルに注目します。その具体例として、政治との結びつきを強める現代アメリカのキリスト教を取り上げ、政治化する宗教の実態と、その背景にある社会変動について考えます。



大賞受賞作品

福音派

—終末論に引き裂かれるアメリカ社会
加藤 喜之 著 定価1,320円 中央公論新社



日時 2026年9月5日(土)
14:00~16:00 (開場13:30)

場所 日本基督教団
銀座教会ビル5階 会議室「ぶどう」

東京都中央区銀座4-2-1

●JR有楽町駅中央口より5分 ●東京メトロ銀座駅 C8、C6出口徒歩1分

駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

(外堀通側のビル入口よりエレベーターで5階へ)

定員
100名
(先着順)

参加費
無料
(要申込)



参加申込 <https://shotentaisho2026koen.peatix.com>

←こちらからお申込みいただけます

■主催 キリスト教出版販売協会

■お問い合わせ先 キリスト教出版販売協会 出版販売部会

E-mail: christ.shb2025@gmail.com

キリスト教書店大賞Facebookページ

<https://www.facebook.com/christianbookoftheyear/>

「いいね」を

クリックして

最新情報をGET!



QRコードで簡単アクセス! ↑

■ヨベル

福音書を解放する

聖書をユダヤ教徒の眼で読む

ジョン・シエルヴィ・スポンク著

佐野真也訳

「現代人の信仰」を追求したアメリカ聖公会司教による、視点の大転換と新たなパースペクティブ。イエスの解放を経験したかったら、先ずイエスをキリスト教二千年の誤解から解放しよう、と語り明かす。

A5判 変・386頁(予定)・予価2640円

閉ざされた信仰を哲学がひらく

隣人と共に生きる対話篇

坂岡大路著

早稲田大学名誉教授、哲学者である竹田青嗣氏熱烈すいせん! 坂岡氏が本書で示しているのはスピノザ的信仰が示す「ほんとう」、多様な信仰の相互承認なる原則!

四六判・344頁(予定)・定価1650円

生きているだけで救われている

無教会の変革?・インマヌエルの原事実

荒井克浩著

すべての人は、すでに無条件に、九と救われている! 神が無条件に人と共に在る——かつて滝沢克己が見出した「インマヌエルの原事実」。無教会伝道者の著者が生命を賭けてこれを継承し、今の言葉に語り継ぐ。イエス・キリストもない、信じるか信じないかでもない、全くの無条件なのだ——福音本来の使信に立った清々しさが全編に溢れている!

四六判・348頁・定価1870円

■教文館

アウグステイヌス『問答法について』

本文と全訳、著者問題とその言語理論に関する研究

水落健治著

ギリシア・ローマ文化の影響が色濃いことから偽作と疑われてきた初期著作を緻密に分析。従来のアウグステイヌス像を問い直す新たな試み!

A5判・518頁・定価9240円

共観福音書問題入門

マタイ・マルコ・ルカはなぜよく似ているのか

INFORMATION

近刊情報

ナタナエル・ワン(王學晟)著

前川 裕、樂満大樹訳

古代から現代まで総勢180人の学説を整理し、図表をまじえて網羅的に紹介する画期的な試み。聖書学の潮流と議論の軌跡がよくわかる一冊。

A5判・210頁・定価3300円

八日目の幼子

主イエスの生涯の説教

近藤勝彦著

説教を通して主イエスの歩みを辿り、聖書が証言する神の救いの歴史を鮮やかに描き出す。教会に生きるすべての人に贈る、円熟の説教24篇を収録。

B6判・180頁・定価2090円

太宰治における聖書

田中良彦著

太宰治はなぜキリスト教に心を寄せたのか? イエスの言葉からどのような慰めを受けたのか? 聖句との初邂逅を辿る論考を含む、太宰文学の人間観を究明する実証的考察。

四六判・口絵8頁+286頁・定価3960円

■新教出版社

日本基督同胞教会の歴史と資料

富坂キリスト教センター編

アメリカのドイツ改革派教会とメノナイト教会に淵源する日本基督同胞教会は、一九〇〇年に伝道を開始し、教団合同まで静岡・小田原、渋谷・名古屋、大阪、神戸など二五教会、二五〇〇信徒を有し、神学者としては有賀鉄太郎を擁した。その歴史の全体像を資料と研究で明らかにし、教会史の欠落を埋めた労作。

B5判・288頁・予価4400円

ユーモア復習

人生を楽しむ7法則

宮平 望著

「ユーモア三愚作」の復讐! 「入門」ではユーモアを理論的に究明、「実践」ではその技術を伝授、「演習」では怒濤の三三〇問でダメ押しをしたはずだが、懲りない著者がさらなる三三〇問をひねりだし、「復習」編を贈ります。

A5判・90頁・予価1320円

書店名	郵便番号	住 所	電 話	フ ァ ャ ッ ク ス	U R L	メ ー ル	郵便振替
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用			02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://essainoki.jp/	shop@essainoki.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新堀3-2 千華クリスチャセンビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス東京	169-0051	新宿区早稲田23-18A/A00ビル2F(通称専門)	03-3203-4137	03-3203-4186	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区関口1-44-4京屋関口ビル日本館内(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkhan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tokiglobe.jp/~yokohama-js/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市瑞穂区星町1-16 日本キリスト教団瑞穂教会内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.cococan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
バイブルハウス京都	606-0007	京都市東区錦土町22 日本基督教団平野教会(外販専門)	090-5138-7020	075-320-1844		kyoto-jbs@bible.or.jp	01010-2-594
バイブルハウス堺	591-8023	堺市北区中百舌鳥町2-87 チャペルこつじ2F	072-255-4970	075-255-4971		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
大阪キリスト教書店	552-0003	大阪市港区薄桜2-18 港ルーテル教会1F	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖燈社)	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0025	神戸市中央区港地145-12 神戸駅前ATビル401	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkhan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
バイブルハウス熊本	862-0971	熊本市中央区大江4-20-23	096-372-3503	共用		kumamoto-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販売部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2026年9月号

特集Ⅱそれでも希望をもって

(責任編集Ⅱ朝岡勝)

寄稿者Ⅱ青木義紀、左近 豊、遠藤勝信、

松永美穂、小林宏和、奥田知志

◆書評 藤本龍児『宗教のアメリカ』(相川裕亮)

◆連載 スズレなるままに(川口弾)、古代イスラエ

ル史入門(日高貴士郎)、人物・日本キリスト教

史(戒能信生)、はやき牧師のさすらい説教録(富

田正樹)、ルカ福音書(山崎ランサム和彦)他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL:03-3260-6148

Email:sales@shinkyo-pb.com

編集室から

私は新聞の書評欄を読むのを週末の楽しみにしている。土曜は朝日、日経、毎日、東京。日曜は読売、産経。販売店に頼んで土曜は全紙配達してもらっている。日曜は近所の図書館で読む。

複数の新聞が取り上げる新刊は要チェックだが、一紙しか取り上げないものだって気になる。

ところで、書評にナツテナイ書評があると腹が立つ。

第一、論じているのがどういう本なのか分からない。たとえば「これはAが2年ぶりに出した長編小説である」みたいなマクラがあればすぐ分かるが、最後まで読んでも小説なのか随筆なのかドキュメンタリーなのか判然としないことが(意外に)多い。

予告

本のひろば

2026年10月号

本・批評と紹介

(巻頭エッセイ) 宮崎薫「本と出会う歲月」

(書評) 朴清民著『主イエスと共に歩む旅路』、石

橋秀雄著『幼子とともに』、崔善愛著『私の「風

速計』、加藤常昭著『日本伝道論』、牧田吉和著

『改革派説教』他

第二に、内容を要約しているのか自説を論じているのか区別できない文章もたいへん多い。これは結構困る。たいがい要約なのだろうけど。

第三に、その本は要するに良いのか悪いのか、読むべきなのかどうか、評者の意見が分からないことが多い。「こんな本は読む必要ない」などと書くのは、はばかれるだろう。それは分かる。でもそんな極端な評価でなくても「書評」なんだから最低限の評価はしてほしい。

大新聞に書評を書くような人たちは、各界で活躍する有識者たちだ。原稿料だって高いのだろう。ちゃんと仕事をしろと言いたい。

だいたい悪口を書いたが、もちろんそんな書評ばかりではありません。いつも選書の参考になっています。念のため。

(小林)

教文館創業140年
記念限定復刊！



ギリシア語新約聖書釈義事典〔全巻セット縮刷版〕
H・バルツ、G・シュナイダー〔編〕荒井 献、H・J・マルクス〔監修〕
新約聖書本文に現れる全ギリシア語語彙の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす比類なき事典として、刊行以来多くの方々にご愛用いただいていたロングセラーを小型化・軽量化。

●A5判・1788頁・定価69,300円

記述に共通点をもちながら、成立順や相互関係が不明瞭な三つの福音書。この謎に取り組んだ古代から現代まで総勢180人の学説を整理し、図表をまじえて網羅的に紹介する画期的な試み。現在の定説がなぜ定説となったのか、聖書学の潮流と議論の軌跡がよくわかる一冊。

●A5判・210頁・定価3,300円



マタイ・マルコ・ルカはなぜよく似ているのか

ナタナエル・ワン（王學晟）〔著〕

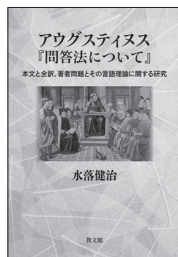
前川 裕・樂満大樹〔訳〕

最初に書かれた福音書はどれか？

共観福音書問題入門

アウグスティヌス『問答法について』

本文と全訳、著者問題とその言語理論に関する研究



水落健治〔著〕

回心した聖人か、異教の修辞学者か？

アウグスティヌスはギリシア・ローマ文化を否定したのか？ 世俗的な論理学を扱うことから偽作と疑われてきた初期著作を、テキスト分析と他文献との比較により彼独自の思想の中に位置づけ、従来のアウグスティヌス像を問い直す画期的論考！

●A5判・524頁・定価9,240円



焰の人

いちのみやまきち
一宮政吉自叙伝

8月5日

一宮政吉 著 旧制三高で学び、救世軍に入るが、ホーリネス教会に転じ、神学教育と牧会に挺身、治安維持法で病の不自由な身を獄中に置くなど、波乱の歩みを感じて振り返る。長く入手困難だった貴重な自伝を復刻。 四六判・定価1760円



滝沢克己 インマヌエルの風景

小林孝吉 著 キリスト者の生涯と希望の思想

7月23日

インマヌエルの原事実には固着し、自由と希望を追求してついに独自の純粹神学に到達した神学者。その人生と思想を描き切った渾身の評伝。 四六判・定価3850円



イザヤ書註解Ⅲ

28—39章

7月24日

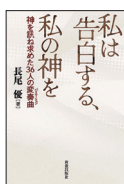
ジャン・カルヴァン 著／堀江知己 訳 深いヘブライ語の造詣に基づいて使信を読み解き、キリストとの関係を強く意識しつつ信仰者への勧告と奨励で各章を結ぶ。あたかも説教のような熱量を込めた註解。全5巻。 A5判・定価7920円



私は告白する、私の神を

長尾 優著 神を訊ね求めた36人の変奏曲 (パリエーション)

多くのキリスト教書を装幀してきた人気デザイナーが、辻邦生、スピノザ、リルケ、山本周五郎、アーレント等々私淑する36人の先達を選び、既成の宗教の枠に収まらない彼らの屈曲に満ちた求神の道のりを、共感をこめて綴ったエッセイ集。 四六判・定価2420円

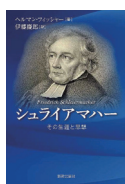


シュライアマー

その生涯と思想

ヘルマン・フイツシャー 著／伊藤慶郎 訳

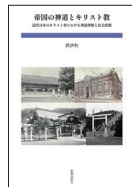
批判版全集と近年の研究成果に基づき、伝記上の重要な出来事、および神学と哲学に及ぶ膨大な著作の全体像を概観する最新の入門的評伝。 四六判・定価2970円



帝国の神道とキリスト教

近代日本のキリスト者における神道理解と社会思想

洪伊杓 著 神道とキリスト教の融合を図った海老名弾正の思想構造を詳細に分析するとともに、当時の社会思想への影響も丹念に辿る。現代日本のキリスト者にも大きな問題を提起する労作。 A5判・定価7700円



本のひろば.com

